

知っていますか？ 子宮けいがんを予防する2つの方法

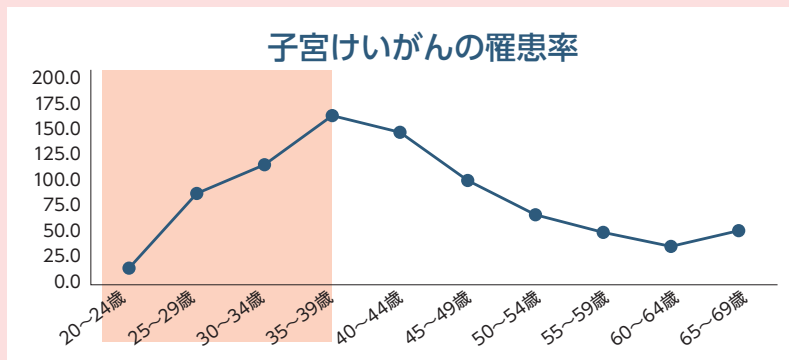
～ HPVワクチンと子宮けいがん検診 ～

健康課健康増進係 ☎(63)8311

まず知ろう！ 子宮けいがんの現状

日本では毎年、約1.1万人の女性がかかる病気です。さらに毎年約2,900人の女性が亡くなっています。

20歳代から多く発病し、30歳代までにがんの治療で子宮を失う人も、年間約1,000人います。



出典：栃木県のがん2019 年齢階級別罹患率（人口10万対、85歳以上まるめ）B.上皮内がんを含む



予防方法①

HPVワクチンを接種する

子宮けいがんの原因となるヒトパピローマウイルスの感染を防ぐワクチン（HPVワクチン）は、定期予防接種として公費で受けることができます（対象者には個別にお知らせしています）。

HPVワクチンにはこんな効果があります

HPVワクチンは、子宮けいがんになりやすいHPV型の感染を防ぐことができますが、中でも9価ワクチン（シルガード9）は、子宮けいがんの原因の80～90%を防ぎます。



予防方法②

子宮けいがん検診を受診する

子宮けいがんは初期の自覚症状が出にくいいため、早期発見をするためには、20歳になったら子宮けいがん検診を定期的に受けることが重要です。

検診では、子宮口から頸部の細胞を採って、前がん病変や子宮けいがんがないかを検査します。21歳になる年度には、無料で子宮けいがん検診を受診することができます。また、20歳以上の偶数年齢女性は、子宮けいがん検診を受けることができるので、ぜひ受診しましょう（自己負担あり）。

ワクチン接種とがん検診で 子宮けいがんを減らそう

日本の接種率は、2019年時点で1.9%と諸外国にくらべ非常に低い状態です。接種率80%のスウェーデンでは、ワクチンを接種した人の子宮けいがんの発生率が、接種していない人に比べ50～90%減少したという調査結果がでています。

一人でも多くワクチンを接種することで、子宮けいがんになる人を減らすことができます。中にはワクチンが効きにくいHPVの型もあるのですが、ワクチンの接種後も、定期的ながん検診を受けてください。

子宮けいがんワクチンは、筋肉内接種のため、強い痛みを感じる方もまれにいます。接種後に不安を感じる場合や気になる症状があるときは、接種した病院や周りの人たちに相談してください。



大野医院 大野貴史先生に
お話をききました。